

～絶対に負けれない戦いがここにあった～

日本史上唯一、天下人同士の対決! 小牧・長久手の戦いを巡る

今から430年余り昔の天正12(1584)年、小牧から長久手、日進のあたりは、小牧・長久手の戦いとして歴史に名をとどめた場所である。この小牧・長久手の戦いは、希代の英雄、羽柴(のちの豊臣)秀吉と徳川家康の二人が相見えた、日本史上、たった一度の天下人同士の対決であり、徳川家康にとって大きな出来事であったと同時に、日本の歴史にとっても重要なターニングポイントとなった。

① はじまり

小牧・長久手の戦いが起こる2年前、京都・本能寺で織田信長が家臣の明智光秀に討たれたことから戦国の世が大きく動き出す。

秀吉は、柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで破ると信長の後継者としての立場を事実上確立した。秀吉と友好関係にあった信長の二男・信雄(のぶかつ)は秀吉を警戒し、不満を持つようになった。信雄は、織田家の同盟者である徳川家康に助けを求めた。家康は、秀吉とはいずれ戦わなければならないと考えていたため、これに応じた。天正12年(1584)3月6日、信雄が秀吉に内通していた3人の家老を殺害したことを端に「小牧・長久手の戦い」は、はじまった。

② 北尾張から東尾張が主戦場

秀吉と家康・信雄の両者とも、信雄の本拠長島城(三重県桑名市)のある伊勢国を戦場と想定していたが、池田恒興(美濃国大垣城主)と森長可(美濃国金山城主)が犬山城(愛知県犬山市)を落城させたため、慌てた家康は北伊勢から北尾張へ急遽転戦した。3月17日、羽黒の戦い(愛知県犬山市)で家康の部将酒井忠次らが森軍を敗り形勢を立て直した。羽黒で敗戦したものの、敵地犬山に拠点をもつことに成功した秀吉は、楽田(犬山市)に着陣した。家康も小牧山(愛知県小牧市)に陣を移し、信雄も長島から小牧山に移った。お互いが出方をうかがうという状況となった。



●めいとう勝家くん
名古屋市名東区のご当地キャラ。現在の名古屋市名東区で生まれた柴田勝家がお散歩中の柴犬に乗り移ったという設定。背中のみいとうで、迷答を斬り軍配で名答を引き出す。

③ 岡崎進軍

両軍睨み合いが続いた4月6日夜半、膠着状態を破ったのは秀吉軍の池田恒興・元助父子と森長可、堀秀政、長谷川秀一、秀吉軍総大将三好信吉(秀吉の甥で後の豊臣秀次)の順で、約24,000人の軍勢が、家康不在の本拠地岡崎に向けて進軍。

通説ではこの発案者は池田恒興とされている。家康が小牧山に居座っているため、今、家康の本拠地岡崎を突けば家康軍は混乱し、そこを突けば勝利できると考えた。

④ 岩崎城の戦い

岡崎を目指した秀吉軍の動きを察知した家康は、4月8日夜に小牧山から小幡城(名古屋市守山区)へ移動。岩崎城主の丹羽勘助氏次に導かれ榊原康政ら4,500人の先発隊と9,300人の本隊が秀吉軍を追った。9日早朝、岡崎へ進軍する池田隊は家康方の城である岩崎城(日進市)を攻めずに通過しようとしたが、岩崎城を守っていた丹羽氏重らが、攻撃を仕掛けてきたため、池田隊は応戦し、落城させてしまった。

⑤ 白山林の戦い

秀吉軍の最後尾は17歳の大将三好信吉。4月9日早朝、白山林(尾張旭市)で朝食をとっていたところを徳川軍の先発隊が背後から急襲。不意を突かれた三好隊は総崩れとなった。信吉は細ヶ根(長久手市荒田/地下鉄車庫北東)付近まで逃がれたが、自分の馬も見失い討死寸前まで追い込まれた。

⑥ 松ヶ根の戦い

三好隊の敗走を知った秀吉方の第2隊の堀秀政は、松ヶ根(長久手市坊の後/中央図書館付近)に陣を構えた。白山林で勝利し突進する徳川軍に鉄砲のつるべ打ちをあげせ、隊列を乱したところに総攻撃を仕掛けた。徳川軍に多数の死者を出す大打撃を与えたが、このとき秀政はすでに家康が東方に進出しているのを知り、深追いを不利と判断し、急ぎ北方へ引き上げていった。

⑦ 仏ヶ根の決戦

4月9日の朝、色金山(長久手市岩作色金/色金山歴史公園)周辺に着いた家康の本隊は、続々と香流川を渡って、午前10時ごろ富士ヶ根(長久手市富士浦)から仏ヶ根(長久手市武蔵塚の北部)、前山(長久手市城屋敷の東部)に陣を構えた。

一方、岩崎城を落とした池田恒興のもとへ、信吉大敗の報告がもたらされると恒興は急いで馬首を返し、すでに布陣を終えた徳川軍に対し、長男元助を右翼に、娘婿の森長可を左翼に配した。戦況が膠着しかけた昼ごろ、家康の本陣に突進した長可が、井伊隊の銃弾を頭に受けて戦死したため、戦いは徳川軍が優勢になった。そして午後1時に池田恒興は永井伝八郎に、子の元助は安藤直次に討たれ、家康軍勝利で終焉をむかえた。

⑧ 和睦 ～戦に勝った家康、戦略で勝った秀吉～

長久手の戦いで勝利した家康は、ただちに小幡城を経て小牧山に戻った。一方秀吉は4月9日の昼ごろ、楽田の本陣で岡崎侵攻隊の敗戦を知り、すぐに大軍を率いて救援に向かったが、時すでに遅く、家康は小幡城まで兵を引いた後であった。翌10日には家康はすでに小牧山まで戻っており、秀吉軍はなすすべもなく楽田へ引き返した。4月下旬に秀吉軍が美濃国鶯沼(岐阜県)に移動すると戦闘地域も尾張西部へ移った。11月になると、桑名から長島方面へ攻撃した秀吉と、長島城にこもる信雄が単独で和睦したため、大義名分を失った家康軍も兵を引き、約8か月間に渡った「小牧・長久手の戦い」は幕を閉じた。

この戦いで、信雄は伊勢国の大半と伊賀国を秀吉に渡し、事実上の敗北。秀吉は、旧信長家臣団を自身へ臣従させ支配体制を再編成、翌年には関白となり全国統一を推し進めていく。家康は、結果的に秀吉に臣従したが、その実力を全国の大名に認識させ、秀吉政権下でも別格の地位を保ち、徳川政権樹立の足がかりを固めていった。

参考資料「長久手合戦・史跡めぐり」

